第 12 回 JGS 宝石シンポジウム in 大阪レポート

JGS 理事、藤田益久

毎年恒例となった jeweller's study club 協賛の大阪シンポジウムが 1 月 18 日「住友クラブ」にて、中央宝石研究所リサーチルーム部長の北脇裕士博士を講師にお迎えし、『**合成ダイヤモンドの最新情報と看破の手引き**』のテーマで 29 名の参加をもって開催された。

昨年、日本国内においてダイヤモンドジュエリーにメレサイズの HPHT 合成ダイヤモンドが混入するという事例が見られるようになった現状をふまえ、そのほとんどが中国製の HPHT 合成であることもあり、北脇博士の中国合成ダイヤモンド工場視察のレポートから講義がはじめられた。吉林省長春の吉林大学では、10 万人にもおよぶ教授と学生を擁し、超硬材料国家重点実験室で国家プロジェクトとして合成ダイヤモンドの研究開発に取り組んでいる。現在、河南省鄭州の工場では大量の宝飾用合成ダイヤモンドが生産されている事実に先ず衝撃を受けた。当初工業用の合成ダイヤモンドの生産をしていたのが、それより高値で売れる宝飾用の生産に切り替って行き、値崩れする位大量に生産されている。

鄭州にある中国主要 10 社で 1 万台以上の製造装置が稼動して、2015 年は 150 億キャラット(そのうちおよそ 250 万キャラットが宝飾品質)がされた。そのうち 80%がインドに流れたという報告があったことである。また、山東省の中国とウクライナとの合弁会社では、7 キャラットまでの大きなサイズのものも生産されている。

宝飾用の合成ダイヤモンドが市場に出回ることによって起こるであろう宝飾業界内の混乱について北脇博士が生産者に意見を求めたところ、自分達には全く関心がないという回答であったことが、これから合成ダイヤモンドの市場への流出がさらに進むことを予感させられた。

また講義では、ダイヤモンドのタイプ別(Ⅰ,Ⅱ)の特性の確認とそれぞれの合成の場合の特徴を整理し、それらの合成のプロセスに基づく現在の判別方法が解説された。

そして観察の時間では、42 セットのカラーダイヤモンドを主とした天然、処理石、合成石のサンプルを手にして観た。衝撃の内容の講義の後であるので、実際には不可能ではあるのだが、合成ダイヤモンドをこれまで以上に関心を持って観ているような会場内の空気を感じた。

シンポジウムの締め括りの参加者の発表では、信頼できる仕入先や信頼できる鑑別機関の重要性が多く出てきた。消費者にダイヤモンドを販売する上での責任の所在を改めて考える機会となったのであるが、販売者として自分自身が責任を取る覚悟を持って臨むことが、この問題の解決方法へ導かれる指針となるのではないだろうか。